九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

J. R. R. トールキンが封印した命名法と家系図

島居, 佳江
福岡女学院大学短期大学部 : 准教授

https://doi.org/10.15017/6790854

出版情報：九大英文学. 65, pp.1-14, 2023-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

J. R. R. トールキンが封印した命名法と家系図

島居　佳江

１．はじめに

J. R. R. Tolkien の命名法と家系図作成は彼自身の趣味、嗜好と相まって非常に特徴的である。トールキンにとって名前を考えることが第一義で、物語の創作はそれら名前や他の創造言語に活躍の場を与えるにすぎなかった。また名前は、登場キャラクター、それらの家族、祖先、そして特定の時や場所で繋がりを持つ。このような性向のトールキンが敢えて名前を与えていない登場人物がいる。1967 年に発表されたトールキン存命中最後の出版である『星を飲んだかじや』(*Smith of Wootton Major*) の主人公はかじや (Smith) で、一般名詞が固有名詞として名前に使われている。また、かじやは父親を除き、先祖に関する情報も持たない。『星を飲んだかじや』が削ぎ落とした特質から、トールキンが人生の最晩年で達した境地について考察したい。

２．『星を飲んだかじや』の特殊性

『星を飲んだかじや』はいくつかの点でトールキンらしくない。トールキンが、固執してきた命名法や家系図を敢えて封印し、「妖精の愛」を説明しようとした経緯をたどる。

『星を飲んだかじや』が発表されたとき、世間は『指輪物語』の作者による作品だと期待した。Flieger が、発刊当時の書評をまとめているが、一部を除き評判は芳しくない。批判的書評では、「ユーモアが無い」、「キャラクターの個性が無い」、「物語に深みが無い」と散々で、「哀歌」と結論づけられてもいる。『ホビット』や『指輪物語』のファンがその同じ興奮を期待して読むと、これらの批判に一票を投じたくなるのも無理はないだろう。しかしながら、

『星を飲んだかじや』はトールキンの作品において、その特殊性故にトールキンの晩年の境地を理解するために極めて示唆に富む作品なのである。

伝記作家 Carpenter によると、トールキンは「イギリスのための神話体系を創造する」（111）というライフワークを持っており、彼が‘real work’と呼んだ『シルマリルの物語』（*The Silmarillion*）の仕事は常にトールキンの念頭にあった（242）。1959 年、40 年にわたるオックスフォード大学での奉仕の後、教授職より引退し、『シルマリルの物語』の完成に集中できるようになった（239）にもかかわらず遅々として『シルマリルの物語』の筆が進まない。そのような時にトールキンは、George MacDonald の *The Golden Key* の序文を書くように依頼され、珍しく引き受けた。しかし、マクドナルドの著作の多くはトールキンからすれば、道徳的な寓意性によって損なわれていると思われた。トールキンはそこで、マクドナルドの読者に対して、「妖精」という語の意味を説明することから始め、その説明のための物語が『星を飲んだかじや』だったのだ（244）。

> The story was meant to last only for a few paragraphs. But it went on and on, until Tolkien stopped, realising that it had a life of its own and should be completed as something separate. In the first draft it was called ‘The Great Cake’ but he soon adopted the title Smith of Wootton Major. (The Macdonald preface was never finished.) (244)

カーペンターが記しているように、数節で終わる予定が延々と続き、トールキンが筆を止めた時、この物語は独立した一つの作品となっていた。そして *The Golden Key* の序文の方はついに完成には至らなかった。この事から分かるように、『星を飲んだかじや』は、ライフワークである神話創作とは無関係に、トールキンが考える「妖精」についての心情が、比較的直接的に書き込まれた作品なのである。

上の引用にあるように、『星を飲んだかじや』は当初 *The Great Cake* というタイトルだった。しかしトールキンの関心がケーキから少年へと移行したため、タイトルもそれに伴い *Smith of Wootton Major* に変更された。‘Wootton

Major'は Smith が住んでいる村の名前なので、直訳は「ウートン大村のかじや」となり、非常に直裁的である。加えて、トールキンの思い入れがある登場人物にもかかわらず、この少年には名前がない。奇妙なことに、かじや以外の登場人物には名前がある。例えば、嫌われ者の料理番頭は Nokes で、かじやの妻は Nell、かじやの息子は Ned Smithson である。全く登場場面がないかじやの娘にさえ Nan という名前がある。かじやは作中、'The boy'としてはじめて登場する。その後 "Smithson he was called while his father was still alive, and then just Smith." (17) と、父親存命中は「かじやの息子」で、父亡き後は「かじや」と呼ばれた旨の説明がある。 "For by that time he was the best smith between Far Easton and the Westwood, and he could make all kinds of things of iron in his smithy." (17) :「かじやはその地方で一番腕の良い鍛冶屋」ではあるが、トールキンが描く登場人物によく見られる権威や血統とは全く無縁である。これまで挙げてきた『星を飲んだかじや』の特殊性を、次節からは『星を飲んだかじや』以外の作品と比べることでより明らかにしたい。

３．トールキンの私製言語と命名法 'nomenclature'

トールキンの命名法に関するこだわりには年季が入っている。子どもの頃から命名法の基となる私製言語を作り、さらにそれを発展させ一定の組織立った原則を持つ言語の発明まで試みていた（Carpenter 50-51）。トールキンの発明言語の一つ、フィンランド語に強く影響された「クェンヤ」は、千に近い語彙を持つほど発展した。この「クェンヤ」は、「クェンヤ」より古い時代に語られていたとされる「原エルダリン語」を基にしている。また「原エルダリン語」は、ウェールズ語をモデルとした「シンダリン」の基にもなっている。トールキンは「クェンヤ」と「シンダリン」の他にもいくつもの言語を考案し、それら言語相互の込み入った関係と言語の系統樹の推敲に心を奪われていた（116-117）。トールキンにとって、こういった言語を生み出すことがまず先で、物語の創作は私製言語に活躍の場を与えるためだと本人が書き残している。

The invention of languages is the foundation. The 'stories' were made rather

> to provide a world for the languages than the reverse. To me a name comes first and the story follows. (*The Letters of J. R. R. Tolkien* 219)

トールキンは創作に先んじて「まずは名前が先にくる」と断言する。また、トールキンは古英語の講義録の中で「古英語文学の多くが失われているため、英雄時代の古い名前への言及ひとつひとつに古物収集的な特別の関心を覚える」（237）と記している。そのような習性を持つトールキンが物語の登場キャラクターへの命名とそれに伴う言語学的な作業に大きな関心を持っていたのは想像に難くない。

> When working to plan he would form all these names with great care, first deciding on the meaning, and then developing its form first in one language and subsequently in the other; (Carpenter 101)

トールキンは「構想を練るときに必ずすべての名前の形式に細心の注意を払った。まず意味を定め、それから私製言語のいくつかで語形を展開させてみる」。こういった特徴は作家が本業ではなく、文献学者（philologist）としての趣味が高じたトールキン独特の執筆スタイルと言える。

> It must be emphasized that this process of invention was/is a private enterprise undertaken to give pleasure to myself by giving expression to my personal linguistic ‘aesthetic’ or taste and its fluctuations. It was largely antecedent to the composing of legends and ‘histories’ in which these languages could be ‘realized’; and the bulk of the nomenclatures is constructed from these pre-existing languages, and where the resulting names have analysable meanings (as is usual) these are relevant solely to the fiction with which they are integrated. The ‘source’, if any, provided solely the sound-sequence (or suggestions for its stimulus) and its purport *in the source* is totally irrelevant except in case of Earendil; (*The Letters* 380)

上の引用はトールキンの‘nomenclature’（命名法）に対する読者からの質問に用意された手紙（実際には出されていない）の一部である。ここでもやはり、物語創作に先んじて発明言語の存在があることが強調されている。分析可能な意味は彼の作品中だけに限定されており、既存言語の意味や語源とは無関係だとトールキンは明言する。

言語に意味が有る故に命名にもトールキン的な語源と意味がある。作中どの名前にもトールキンのこだわりが満載だが、その中から *Unfinished Tales* の Appendix E に掲載されているエルフの夫婦、ケレボルンとガラドリエルの名前をトールキンの命名に関する習慣の一例として挙げる。

> It is said in an essay concerning the customs of name-giving among the Eldar in Valinor that they had two “given names” (essi), of which the first was given at birth by the father; and his one usually recalled the father’s own name, resembling it in sense or form, or might even be actually the same as the father’s, to which some distinguishing prefix might be added later, when the child was full-grown. The second name was given later, sometimes much later but sometimes soon after the birth, by the mother; and these mother-names had great significance, for the mothers of the Eldar had insight into the characters and abilities of their children, and many also had the gift of prophetic foresight. In addition, any of the Eldar might acquire an *epessë* (“after-name”), not necessarily given by their own kin, a nickname – mostly given as a title of admiration or honour; and an *epessë* might become the name generally used and recognized in later song and history (as was the case, for instance, with Ereinion, always known by his *epessë* Gil-galad).
>
> Thus the name *Alatáriel,* which, according to the late version of the story of their relationship (pp. 242-43), was given to Galadriel by Celeborn in Aman, was an *epessë* (for its etymology see the Appendix to *The Silmarillion*, entry *kal*-), which she chose to use in Middle-earth, rendered into Sindarin as *Galadriel*, rather than her “father-name” *Artanis*, or her “mother-name” *Nerwen*.
>
> It is only of course in the late version that Celeborn appears with a High-

elven, rather than Sindarin, name: *Teleporno*. This is stated to be actually Telerin in form; the ancient stem of the Elvish word for “silver” was *kyelep*-, becoming *celeb* in Sindarin, *telep*-, *telpe* in Telerin, and *tyelep*-, *tyelpe* in Quenya. But in Quenya the form *telpe* became usual, through the influence of Telerin; for the Teleri prized silver above gold, and their skill as silversmiths was esteemed even by the Noldor. Thus *Telperion* was more commonly used than *Tyelperion* as the name of the White Tree of Valinor. (*Alatáriel* was also Telerin; its Quenya form was *Altáriel.*) (279)

上の引用はローリエンを統治するエルフのケレボルンとガラドリアルの名前の由来から引用した一部である。ヴァリノール（エルフの国）のエルダール（エルフの種族）間で慣習となっている命名法についての小論から抜粋という体裁をとっている。トールキンはこのように著作の中で「（架空の）本に書かれている」というスタイルを好んで使った。与えられる名前は一つではなく、「父名」「母名」また「エペッセ（後の名前）」等があり、それぞれが接頭辞などで変化することがある。これら複数の名前のひとつひとつにトールキンの創作言語や創作歴史との関連があり、また時代と共に語形が変化していく。メインキャラクターではないケレボルンとガラドリアルの名前への言語的関心を読者が共有するとは限らないが、トールキンの解説はこの引用後も延々と続く。

これまでにあげたトールキンによるくどいほどの説明で一端が垣間見えたかと思うが、トールキンは私製言語を驚くほどの完成度で作り上げた。その音や意味が他言語と似ている場合もあるが、それはほとんどの場合トールキンが意図したことではない。トールキンにとっては、私製言語が先で、命名も私製言語から由来し、作品内つまりトールキンの創造する世界でのみ意味が通じる。故に「名前がない」こともトールキンのこだわりの結果で、一つの着地点だと考えられるのである。

４．家系図‘family tree’

これまでトールキンが文献学者（philologist）ならではの、言語と命名法に

強い思い入れがあることを見てきたが、それに関連して家系図にまでトールキンの拘りが及ぶ様を確認する。

> Tolkien was foremost a lover of languages and their interrelationships. Indeed, he reputedly said, “I am a philologist, and all my work is philological.” As such, family trees serve another purpose: they allowed Tolkien to play with the meanings and etymologies of his characters’ names, as well as with how these derivations related characters to one another, to families and forebears, and even to a particular time or place. The analogy between the names in a family tree and the central linguistic concerns of Tolkien’s academic work is clear. Tolkien alludes to this connection, perhaps a little obliquely, in “On Fairy-Stories” as “the desire to unravel the intricately knotted and ramified history of the branches of the Tree of Tales,” which is “closely connected with the philologists’ study of the skein of Language.” (188)

Fisher は、家系図はトールキンに彼の創造した登場キャラクターたちの名前で意味と語源を考える喜びを与えると言う。その名前は登場キャラクター間、家族、祖先また特定の時や場所で関連する。家系図の名前とトールキンの専門である言語学的関心との類似は明らかである。

The Lord of the Rings の巻末に、Dwarves, Hobbits, そして Men の年表及び家系図が紹介されている Appendices A, B, C は、ページ数にして 74 ページにも及ぶ。Hobbits の家系図の最初に “The names given in these Trees are only a selection from many.” (1099) とあるように、これらに入りきれなかった物語背後の情報はまとめると数冊分の本になる。トールキンの死後、息子クリストファーによってそれらの一部は発刊された。*The Silmarillion* では、エルフの歴史や枝分かれしたエルフ種族の家系図が微に入り細に入り描かれる。また *The Hobbit* では、主人公の Bilbo Baggins は、上流階級である Baggins 家と冒険家気質の Brandybuck 家の婚姻により生まれ、両家の良い特質がブレンドした結果という設定になっている。このようにトールキンは自らの楽しみの一つとして、自分が創造したキャラクターに膨大で相互に入り組んだそれぞれ

の情報を与え、それらはキャラクター達の特質を決定付ける要素ともなり得た。ところが、『星を飲んだかじや』の主人公、かじやにはそれがない。かじやの父親についての簡単なメモは残されているが、一代遡るに過ぎない。次節からは、『星を飲んだかじや』で、トールキンが職業病のように拘った命名法や家系図を封印した理由を探っていきたい。

５．「妖精の愛」を説明するための物語

５―１　執着を捨てる

トールキンは『星を飲んだかじや』について解説した自身のエッセイの中で、妖精の愛についてこう説明する。

> The love of Faery is the love of love: a relationship towards all things, animate and inanimate, which includes love and respect, and removes or modifies the spirit of possession and domination. (131)

妖精の愛は、愛の愛であり、それは愛と尊敬で所有や支配ではない。トールキンは「妖精の愛」について考察を深める中でこの結論に至った。命名法や家系図と共に捨てたものは‘the spirit of possession and domination’「所有と支配」と言えまいか。

トールキンは『星を飲んだかじや』で「妖精の愛」を説明するために、一番大切なことを改めて考え、それ以外の物を削ぎ落としていったのではないだろうか。かじやは、幼い頃、妖精の星を飲み込み、長年それを額につけ妖精の星に守られて生きてきた。妖精の星を手放すことを躊躇するかじやに妖精の王が言う。「いつまでも独り占めにしたり、家宝としてしまいこんでおいてはいけないものがあります。そういうものは一時的に貸し与えられたものなのです。あなたは他の人にこの星が必要だとは考えないかもしれないが、しかしそうなのです。もうあなたが星を手放す時が迫っているのですよ」(38)。かじやは「正しい意図」で、妖精の星を自分の直系にではなく、嫌われ者のノークスの孫に譲渡を決める。かじやは「これまで妖精の星が自分のところに持ってきてくれたものに感謝していた」(38)、そして「差し貫かれるよう

な痛みを感じ」(41) ながらも妖精の星を手放した。トールキンは、かじやに執着を捨てるように導いたが、これは作者自身を投影しているのではないだろうか。

5－2　拘りを手放す – *Leaf by Niggle*

命名法や家系図はニグルの木の葉とも言えるのではないだろうか。カーペンターによると、“Leaf by Niggle”「ニグルの木の葉」はトールキン自身が「完全に行きづまった」と認めたある朝、目覚めると頭の中に一つの短い物語があり、それを走り書きして、この世に産まれた作品である。「行きづまった」原因は、トールキンの多忙なライフスタイルはもちろんだが、彼の完璧主義にもあった。彼はいくつもの完全へ固執し、疲弊していた。そして、ついには何ひとつ達成できなくなるのではないかと恐れていた。物語はトールキンのように細部に念を入れすぎる、ニグルという画家の話である。トールキンはこの中で、自分の神話の「木」に対する最悪の恐れ、ニグルのごとく、仕事が完成するずっと前に、この世界から去らねばならないのではないかを表現した。トールキンは「これを実際に書いてみることによって、恐れが吹き払われ、再び『指輪物語』に取り組むことができたのであった」(232)。

> He had a number of pictures on hand; most of them were too large and ambitious for his skill. He was the sort of painter who can paint leaves better than trees. He used to spend a long time on a single leaf, trying to catch its shape, and its sheen, and the glistening of dewdrops on its edges. Yet he wanted to paint a whole tree, with all of its leaves in the same style, and all of them different.
>
> There was one picture in particular which bothered him. It had begun with a leaf caught in the wind, and it became a tree; and the tree grew, sending out innumerable branches, and thrusting out the most fantastic roots. Strange birds came and settled on the twigs and had to be attended to. (94)

「ニグルには、かきかけの絵が何枚かあった。そのほとんどは大き過ぎ、ニグルの技術のほどから見れば野心的であり過ぎた。ニグルは、もともと木よ

りも葉の方をうまくかけるたちの絵かきだったのだ。一枚の絵をかくのにニグルは長い時間を費やした。その葉のかたちを、その葉のつやを、葉を縁取る露の玉の輝きをとらえようと心を砕いた。それでもニグルは葉だけではなく、木の全体をかきたいものだと願っていた。その木の葉を全て同じスタイルでかこう。しかし、その一枚一枚は異なっていなくてはならない。

いくつかある絵の中でニグルをとりわけ悩ませるものが一枚あった。その絵は風にもてあそばれる一枚の葉をかくことから始まった。そしてそれが木の絵になってしまったのだ。木はやがて数えきれぬほどの枝を伸ばし、奇怪なかたちの根を張った。名も知らぬ鳥たちがやってきて小枝にとまるようになったので、ニグルは彼らの方にも気を配らなくてはならなくなった」。

この ‘one picture’ は Kilby はじめ多くの批評家が指摘するように、トールキンの神話創作を指すと考えられる。「葉」はトールキンを魅了してやまなかった私製言語、命名法、そして家系図などの文献学的な追求であろう。トールキンを悩ませる木は *The Lord of the Rings* で、この作品が作者の思惑を超えて成長し、全体の整合性を図るのに困難を覚えるほどになった。「ニグルの木の葉」は非常にアレゴリカルな作品である。トールキンはニグル同様、葉というこだわりを手放し、木全体を描きたいと考えていたに違いない。

５−３　カトリシズムから遠去かる

『星を飲んだかじや』には、『指輪物語』の登場人物たちのように、彼らの世界の平和と秩序を守るため、使命に邁進する人物は出てこない。妖精の国へのパスポートとなる妖精の星は、行いが相応しかったなどという正当な理由ではなく、偶然度の高い要因によって与えられる。それは神の無条件の愛を表現するのに現実的である。神の愛は与えられ、それはただ感謝して受け取るべきだ。妖精の星には返却の時があった。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」（ヨブ記 2 : 21）。神に対する黙従の模範者としてのヨブのことばを、かじやが代弁しているかのようである。トールキンの描く「妖精の愛」は人間によって線引きされた宗派を超え、人間の作った儀式、典礼に関係のない深い真実の神の愛を表現しようとしたのではないだろうか。

トールキンは、敬虔なカトリック信者だった。島居が、カトリシズムの重

要なサクラメントのシンボリズムがトールキンの主要作品中に豊かに書き込まれていることを例証している。しかしながら、トールキンは晩年、カトリック改革の波に翻弄された。『星を飲んだかじや』は、ちょうど第二バチカン公会議が終わった後、様々な変更の公布がなされている頃に発刊された。Encyclopædia Britannica によると、アジョルナメント（現代化）をテーマに行われた第二バチカン公会議では、教会の構造、典礼、そして教義に刷新が行われ、サクラメントが大幅に改正されている。それらは近代化を掲げ、平信徒がサクラメントを容易に理解できるように、そしてミサへの参加が促されることを目的としていた。また、第二バチカン公会議では、エキュメニズムが提唱された。それは、多様性を認め、その中でより大きな統一を計ろうというコンセプトだった。これらの改革に対し、トールキンは多様化した教会を枝に喩え、枝の手入れがエキュメニズムと混同されていると嘆き（394）、手紙で以下のように息子に訴える。

> ‘Trends’ in the Church are …. serious, especially to those accustomed to find in it a solace and a ‘pax’ in times of temporal trouble, and not just another arena of strife and change. But imagine the experience of those born (as I) between the Golden and the Diamond Jubilee of Victoria. Both senses or imaginations of security have been progressively stripped away from us. Now we find ourselves nakedly confronting the will of God, as concerns ourselves and our position in Time. (*The Letters* 393)

「ヴィクトリア女王在位 50 年から 60 年の間に生まれ、カトリックの伝統に安らぎと慰めを感じていた者にとって教会のトレンドは深刻だ。今まで安全で守られていた感覚が瞬く間に剥がし取られるように感じられる。今、我々は、この時代に生きる意味を考え、ありのままの自分で神の意志に対峙している」。トールキンは心から愛していたサクラメントを、心から信頼していたローマカトリック教会に改められるという大きな矛盾に直面した。ローマカトリック教会はそれまでの主張を変え、トールキンにとってそれは裏切りに等しいことだった。そのような状況でトールキンの描きたいと望む妖精物語

はカトリシズムから離れ純粋な愛に舵を切る。

> Faery represents at its weakest a breaking out (at least in mind) from the iron ring of the familiar, still more from the adamantine ring of belief that it is known, possessed, controlled, and so (ultimately) all that is worth being considered – a constant awareness of a world beyond these rings. More strongly it represents love: that is, a love and respect for all things, 'inanimate' and 'animate', an unpossessive love of them as 'other'. (144)

「妖精は、最も弱いところでは、ありきたりなものという鉄の指輪からの（少なくとも心の中での）決別を表現している。さらには、それが知られ、所有され、支配されるものであり、ゆえに（究極的には）指輪が考慮されるに値する全ての物である、というとても硬い信念からの決別を表現している。―つまり、これらの指輪を超えた世界を常に意識することを妖精は表現しているのである。それは、全ての事柄、無生物そして生物、に対する愛と尊敬で、それらを他者として所有しない愛である」とトールキンは、妖精の愛の意義を繰り返す。『指輪物語』は、所有や支配から離脱する困難さを描いたが、その中心となる指輪は所有欲や支配欲を心の内に掻き立てる物で、それをめぐって多くの戦いが生まれた。それらの戦いは読者を楽しませたが、トールキンはもはや読者を楽しませることよりも、ただ愛を伝えたい境地に達している。その愛もカトリシズムが提唱する儀式、典礼などに縛られない、ただ神を見上げるという姿勢に到達している。以前の作品にふんだんに盛り込まれたサクラメントのシンボリズムは『星を飲んだかじや』には、もはや見られない。それが、指輪、そしてカトリシズムからの決別であり、「妖精の愛」が表現するものではないだろうか。

６．おわりに

命名法や家系図に強い拘りを持つトールキンが登場人物に名前と家系図を与えないという選択に込めた意味を考察した。トールキンは『星を飲んだかじや』を、「妖精」ひいては「妖精の愛」を説明するために執筆した。『星を

飲んだかじや』の主人公は「かじや」が名前で、その名前に由来する家系図も持たない。これはトールキンに限って非常に異例である。なぜならば、トールキンの命名法は子どもの頃から発展させてきた私製言語が基になっており、それは極めて個人的な彼の楽しみであったからだ。物語の創作は私製言語を実際に用いる舞台であり、彼の文献学者としての嗜好と相まって物語背景の家系図も膨大な情報量となっている。

命名法や家系図とともにトールキンは執着や拘りを捨てたのではないだろうか。「妖精の愛」は「所有や支配」ではないとトールキンは説く。「ニグルの木の葉」では、そのニグルの木の葉に象徴される文献学的なこだわりを手放すことが示唆されている。またその執着に、一部のカトリシズムが含まれている可能性を当時のカトリック情勢やトールキンの書簡に探った。第二バチカン公会議で行われた改正や刷新はトールキンに深い失望をもたらし、ローマカトリック教会から心が離れるきっかけとなった。トールキンが人生の晩年でたどり着いた「妖精の愛」は、宗派や儀式、礼典などの垣根を越えた神の愛の核心だったのではないだろうか。

引用文献

Carpenter, Humphrey. *J. R. R. Tolkien: A Biography*. HarperCollins, 2011.;カーペンター，ハンフリー.『J. R. R. トールキン　或る伝記』菅原啓州訳，評論社, 1982.

Fisher, Jason. “Family Trees.” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, pp. 188-189.

Kilby, Clyde. Unpublished parts of chapter, “Woodland Prisoner,” p. 13 in Kelby Files, 3-8, Wade Collection Wheaton College, Wheaton, IL.

“The Church Since VaticanII.” *Britannica*, 2020 Encyclopædia Britannica, Inc. https://www.britannica.com/topic/Roman-Catholicism/The-church-since-Vatican-II.

Tolkien, J. R. R. *Beowulf*. An Imprint of HarperCollins*Publishers*, 2014.

-------. *Smith of Wootton Major*. Edited by Verlyn Flieger, HarperCollins Publishers, 2005.

-------. *The Hobbit*. A Del Rey Book, 1996.

-------. *The Letters of J. R. R. Tolkien*. Edited by Humphrey Carpenter and Christopher Tolkien, HarperCollins Publishers, 1981.

-------. *The Lord of the Rings.* Harper Collins Publishers, 2005.

-------. *Tree and Leaf*. Harper Collins Publishers, 2001.; トールキン, J. R. R. 『妖精物語について』猪熊葉子訳, 評論社, 2003.

-------. *Unfinished Tales of Númenor and Middle-earth*. Ballantine Books, 1980. ; トールキン, J. R. R. 『終わらざりし物語』山下なるや訳, 河出書房新社, 2004.

島居佳江.「トールキン作品に見るサクラメントのシンボリズム」日本比較学会比較文化研究中国・四国支部 140 号, pp. 133-144.

『聖書　新改訳』日本聖書刊行会, 1995.